

「臨在はノアの日のように」とあるとは、実際に何を意味するのでしょうか

「その日と時刻についてはだれも知りません。」と誰も知り得ないと断言された「その日」とは厳密に何の日のことでしょうか。出来事の流れを整理してみると、はっきり分かってきます。

(マタイ 24:21 - 28)

21,22 「…二度と起きないような大患難がある…」

大患難の最中に見られる出来事

23-26『ここにキリストが』とか、『あそこに！』

(偽預言者に警戒するように)

偽預言者を信じてはいけない理由の詳細説明)

27「人の子の臨在は稲妻のよう」

28「死がいのある所には驚が集まっている」

キリストがお答えになった記述の中でここで初めて「臨在」の語が現れます

(マタイ 24:29 - 31)

29 「それらの日の患難のすぐ後に、太陽、月、星に異変」

30 「その時、人の子のしるしが天に現われ、天の雲に乗って来るのを見る」

31 「選ばれた者たちを集める」

(マタイ 24:32 - 35)

32 「いちじくの木の場合」

33 「同じようにこれらのすべてを見たなら、  
彼が近づいて戸口にいることを知る」

34,35 「これらのすべての事が起こるまで、  
この世代は決して過ぎ去らない」

「出来事」ではなく、「臨在」までの一連の流れをまとめた記述

ここからが「臨在」そのものの詳細説明

(マタイ 24:36 - 42)

36 「その日と時刻についてはだれも知りません。天のみ使いたちも子も知らず、ただ父だけが知っておられます。

37 人の子の臨在はちょうどノアの日のようなからです。

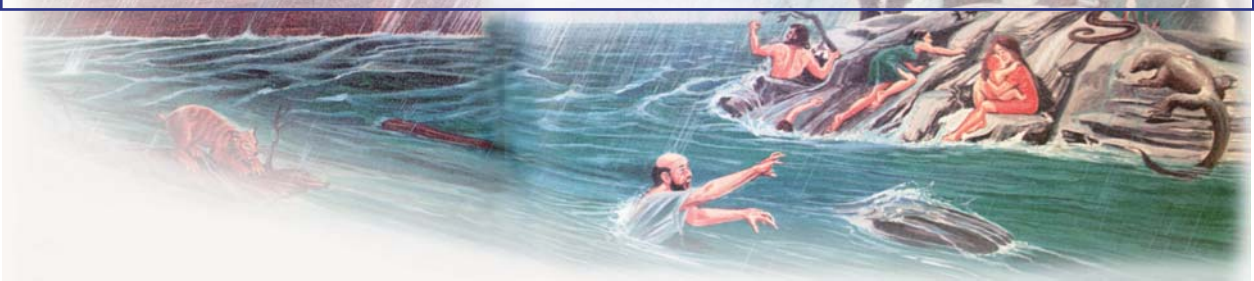
38 洪水前のそれらの日、ノアが箱船に入る日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。

39 そして、洪水が来て彼らすべてを流し去るまで注意しませんでした、人の子の臨在の時もそのようになるのです。

40 その時二人の男が野にいます。一方は連れて行かれ、他方は捨てられるのです。

41 二人の女が手臼をひいているでしょう。一方は連れて行かれ、他方は捨てられるのです。

42 それゆえ、ずっと見張っていなさい。あなた方は、自分たちの主がどの日に来るかを知らないからです。



「その日」は「人の子の臨在」の日であると、24：37で明らかにされています。そしてそれは、「ノアの日」のようだという事です。どういう意味で「ノアの日」のようなのでしょうか。その直前まで「人々は注意しなかった」という点です。それはつまり、その日までに「用意ができていない」ノアの時代で言えば、「箱船に入っていない」状態で、その日を迎えてしまうと言うことです。

従って、「箱船の戸が閉じられた」日に相当すると思えるキリストの臨在の日には、すでに、その時点で「連れて行かれる者」と「捨てられる者」の最終的分離がなされるということです。ノアの日には洪水で滅びた人と生き残った人の分離がその日に決定づけられたのと同様です。「それゆえに」とは、臨在したら、直ちに捨てられてしまう可能性があるゆえに、ということであり、それゆえ、ずっと見張っていなさいと警告されています。

なぜ「ずっと」なのでしょう。なぜなら、どの日に来る（ギ語：エルケータイ）かを知らないからです。

当然、臨在（ギ語：パルーシア）が始まってから見張り初めても、すでに遅いと言うことです。（この文脈からも、臨在はつまり到着であり、この二つの語句の異なった意味としての使い分けはされていません）

何を見張っているべきなのか、それは臨在の開始を見張っていなさいということです。臨在されたら、それ以降、「見張って」いなければならない出来事はもはや何ひとつありません。言い換えれば、キリストの臨在は、裁きの時であり、最終的分離がなされる時であると言う意味で、「ノアの日」のようなのです。

このキリストの臨在が裁きを執行する日であることは、ルカの方の記述から一層明らかです。

(ルカ 17:24 - 37)

24 稲妻は、そのひらめきによって、天の下のところから天の下の別のところに輝きわたりますが、人の子もちょうどそのようだからです。...

また、ノアの日に起きたとおり、人の子の日にもまたそうなるでしょう。

27 人々は食べたり、飲んだり…ついにノアが箱船の中に入る日となり、洪水が来て彼らをみな滅ぼしました。

28,29 また同じように、ちょうどロトの日に起きたとおりです。人々は食べたり、飲んだり…しかし、ロトがソドムから出た日に天から火と硫黄が降って、彼らをみな滅ぼしたのです。

30 人の子が表わし示されようとしている日も同様でしょう。...

34 …その夜、二人の男が一つの寝床にいるでしょう。一方は連れて行かれ、他方は捨てられるのです。

35 二人の女が同じ臼でひいているでしょう。一方は連れて行かれ、他方は捨てられるのです」。

37 そこで、彼らはこたえて言った、「主よ、どこですか」。イエスは彼らに言われた、「死体のあるところ、そこには驚も集まっているでしょう」。

ルカの記述も同様に、臨在は稲妻のように、誰にでも知覚できる類の経験となり、ノアの日やロトの日と同じく、「滅び」に特徴付けられた日であり、分離がなされる日であることは明白です。

内容的に言うところのルカの記述は、マタイの方の24章の27と28節の間に挟まる内容に

なっています。

改めて、引用してその点を確認しておきましょう。

(マタイ 24:23 - 28)

23 「その時、『見よ、ここにキリストがいる』とか、『あそこに！』とか言う者がいても、それを信じてはなりません。

24 偽キリストや偽預言者が起こり、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうとして、大きなしや不思議を行なうからです。

25 ご覧なさい、わたしはあなた方にあらかじめ警告しました。

26 それゆえ、人々が、『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行ってはなりません。『見よ、奥の間にいる』と言っても、それを信じてはなりません。

27 稲妻が東の方から出て西の方に輝き渡るように、人の子の臨在もそのようだからです。

28 どこでも死がいのある所、そこには驚が集まっているでしょう。

ここでは、大患難の最中に見られる偽預言者の惑わしに対する警告の言葉に関連して、稲妻の話しと死骸に集まる驚の話しが出てきますが、ルカの記録と併せて考慮すると、これは、大患難後の「臨在」の時の話しであることが分かります。

この「どこでも死がいのある所に驚が集まっている」という記述は大変難解ですが、これが大患難の最中に見られる事象ではなく、「臨在」時の出来事だとみると、ある程度、推測することができるように思えます。

マタイ 23-27 の話しの目的は、ある特定の場所に注目すべきではない、と言うことを示すために語られています。

ルカの方では、「連れて行かれる者」と「捨てられる」(滅ぼされる)者との分離について、弟子たちが「どこですか」と尋ねていますが、その質問に対する答えとしての驚の話しは、恐らく、地域的な問題ではなく、臨在の日の裁きは、どこと言わず、その裁きの必要な場所すべてで、行われるものであると言うことを示唆している、つまり、「どこでも」死骸(滅びに値するもの)が裁き主の目から逃れる事はないと言うことを示しているのかもしれませんが。

あるいは、関連があるかもしれない次の聖句に見られるような実際の裁きそのものの情景を示しているのかも知れません。

(啓示 19:17 - 18) 「…中天を飛ぶすべての鳥に言った、「さあ、来なさい、神の大きな晩さんに集まれ。王たちの肉、軍司令官たちの肉、強い者たちの肉、馬とそれに乗る者たちの肉、そしてすべての者、すなわち自由人ならびに奴隷および小なる者と大なる者の肉を食べるためである」。

(エゼキエル 39:4、17) 「…あなたはイスラエルの山々で倒れる。あなたとあなたのすべての隊、およびあなたと共にいるもろもろの民は。わたしはあなたを猛きんに、あらゆる翼の鳥、そして野の野獣に食物として与える」…

『あらゆる翼の鳥と野のすべての野獣に向かって言え、「集まって来い。わたしがお前たちのために犠牲にしようとしているわたしの犠牲の周りに、イスラエルの山々における大いなる犠牲の周りに集まれ。…」

いずれにせよ、「臨在」は裁きの時であることは、明白です。  
それで、弟子たちの尋ねた「あなたの臨在」と「事物の体制の終結」（世の終わり）は別々の時ではなく、同じ時であることがわかります。

最後に簡単に「終わりのしるし」に関する記述の大まかな出来事を順を追ってまとめておきましょう。この一連の流れは、出来事に沿った記述であることは「ものみの塔」も認めています。

\*\*\* 塔 94 2/15 10 ページ 10 節 『あなたの臨在のしるしには何がありますか』\*\*\*  
「イエスは何か所かで幾つかの出来事を起きる順序どおりに述べておられます。英訳聖書では「それから」という言葉は、単に「それで」とか、「しかし」といった意味で用いられることがよくあります。しかし、マタイ 24 章 14 節の「それから」という言葉は、ギリシャ語のトテという副詞に基づく訳語です。ギリシャ語の専門家の説明によれば、トテは「時の指示副詞」で、「時間の点で次に起きることを述べるために」、あるいは「続く出来事を述べるために」用いられます」

偽預言者 『その時が近づいた』という声上がる  
大規模な戦争、地震、疫病、食料不足（ここまでは、苦しみの始まり）

患難、殉教、憎しみの的  
全世界への証しの業（これは、こちらから地域に出向いて行う伝道活動ではなく、患難の最中、当局に呼び出される事によってなされる業）

荒廃をもたらす嫌悪すべき者の登場  
その者によってもたらされる大患難

偽預言者  
太陽、月、星の異変  
人の子の臨在  
選ばれた者たちを集める  
裁き（滅び）

さて、この聖書の記録と、ものみの塔の「終わりのしるし」シナリオを比較してみましょう。

『その時が近づいた』という声上がる  
\*\*\* 告 5 章 60 ページ 主の再来をふれ告げる（1870 - 1914 年）\*\*\*  
『1914 年に注意せよ！』というのが旅行する数百人の福音宣明者の叫びであり、彼らは [ラッセルに関係した] この風変わりな信条を説きながら国中を回り、『神の王国は近づいた』という教理を宣揚した」

人の子の臨在（1914 年）  
大規模な戦争、地震、疫病、食料不足  
全世界への証しの業（これは、こちらから地域に出向いて行う伝道活動）

（これから将来に成就すると言われている事柄）  
荒廃をもたらす嫌悪すべき者の登場  
その者によってもたらされる大患難  
裁き、ハルマゲドン



ものみの塔の解釈は、先ず真つ先に「臨在」があり、その後、世界的伝道の業が有り、そしてこれから将来、大患難の災いが来るという事になっています。

\*\*\* 書籍「世界的な安全」11章91-92ページ4節 \*\*\*

「1914年に天の王国が誕生し、サタンとその悪霊たちが天から追い出された後、「今や、救いと力とわたしたちの神の王国とそのキリストの権威とが実現した！わたしたちの兄弟を訴える者、日夜彼らをわたしたちの神の前で訴える者は投げ落とされたからである」と発表するのはふさわしいことでした。(啓示 12:1 - 10)」

\*\*\* 啓 26章 171 ページ 1-2 節 神の神聖な奥義—その輝かしい最高潮！ \*\*\*

「第七のみ使いが吹き鳴らす日、彼がラッパを吹こうとするその時に、神が預言者なるご自分の奴隷たちに宣明された良いたよりに基づく神の神聖な奥義は、確かに終わりに至る」。その最後のラッパを吹き鳴らす、エホバのご予定の時は到来しました！…ヨハネはそれについてわたしたちに知らせることを大変喜んでいますが、それで、こう書いています。「また、第七のみ使いがラッパを吹いた。すると、大きな声が天で起きてこう言った。『世の王国はわたしたちの主とそのキリストの王国となった。彼は限りなく永久に王として支配するであろう』」。(啓示 11:15) … 神聖な奥義は喜ばしい最高潮に達します！それは、主エホバがご自分のキリストを共同の王として即位させられる 1914 年に、輝かしい壮大な仕方で堂々たる終わりを迎えます」

ものみの塔は<啓示 11:15>や<12:10>が 1914 年に成就したとしています。

この年に王国が立ち、キリストは臨在されたという解釈です。

しかし、この出来事は第 7 のラッパが吹かれた時の出来事です。

つまり、もしこれが 1914 年なら、第 1 から第 6 のラッパの出来事は、1914 年以前に終わっているということです。第 1 から第 6 の出来事とは大規模な様々な「災い」です。

福音書でキリストご自身が、ご自分の臨在は「それら大患難のすぐ後」と述べておられる事から分かるように、これら 1-6 の災いは「大患難に相当するものです。

太陽、月、星に異変が見られ、そのすぐ後に起きるとされる「臨在」の前の段階で、予備的な「臨在」が開始されるなどという事は聖書のどこにも記されていません。

まして、大規模戦争、地震の頻発などの苦しみの始まりと同時にキリストが臨在するとか、王国が立つなどと言う記述は、暗示するものすらありません。

ものみの塔の解釈と、その歴史の事実と、聖書の記述を照らし合わせると、もうメチャクチャな状況になっています。